

尊星王像成立考 一冠の動物表象を中心に一

孫 語崎 (慶應義塾大学)

尊星王法は、智証大師が請来した北辰星を中心とする星宿法とされ、天台宗寺門派の一秘法として重要視されてきた。しかし、本尊となる尊星王の図像の成立については、未だ不明な点が多く、各側面から検討を加える必要がある。本発表では、鎌倉時代制作とされる園城寺所蔵の絹本着色尊星王像(以下、園城寺本)や、『別尊雑記』掲載の妙見(尊星王)曼荼羅(以下、『別尊』本)等の白描図像に見受けられる動物形象の冠に着目するものである。それについては既に、請雨神の龍頭説と土曜が戴く牛冠の変容説など幾つかの指摘がなされているが、発表者は道教・陰陽道の影響、並びに尊星王の利益と関連する当時の時代背景に着目し、動物の冠の成立について新たな説を提起したいと考える。

尊星王像に見られる動物の冠は、園城寺本の鹿と、『別尊』本の猪に大別され、それら種類の別には宗派間での規則性が認められる。まず、鹿冠については、天台宗寺門派に集中しており、『宝秘記』では『阿含経』を挙げて解釈するが、この記載はおそらく後世の仮託と推測される。他方、猪冠は真言宗で見られるものの、その成立については真言宗系の史料で詳しく触れられることがなく、経軌でも説明が無い。動物の冠の根拠を経軌に見出すことは、困難だと考えられるのである。

その成立の解明には別の視点が必要である。まず猪冠については、道教・陰陽道との関わりに注目したい。事相書の記載によれば、尊星王は「天皇大帝」と称され、北辰星の人格神である天帝と同一視される。発表者はこれに基づき、尊星王が戴く猪冠は、中国において猪が北辰・北斗を象徴する習慣と関わると推測する。猪が北辰等を象徴することは、真言宗の祖師一行と真言法流に連なる明恵の記事にも見られ、真言宗内に伝承されていたことがわかる。従って、尊星王が戴く猪冠は、古代中国から伝来した北辰・北斗を猪と関連づける信仰と関わる可能性が高い。

一方、鹿冠については、十二世紀末期に摂関家が行った修法に出現した尊星王と、不空羂索観音菩薩の合祭に関わると考える。院政期にかけて大きな政治変革に直面した藤原北家は、宗教的側面からも一門の地位を固める必要に迫られた。この時、北家と緊密な関係を維持していた寺門派は、「背合像」という新たな像を用いた尊星王法によってこれに応えた。北家は、白河院時代から皇室独占の傾向を示していた尊星王に鹿のモチーフを加えることで、藤原家の氏神である春日明神と、守護神である不空羂索観音菩薩とを結びつけ、ひいては皇室との信仰的繋がりを構築する狙いがあったのではないかと考える。以上、本発表では尊星王の動物の冠の成立について、新たな視点から考察を加えるものである。